

1 指導概要

教 科		科 目			
理科		生物	単位数： 4 単位		
指導目標：日常生活や社会との関連を図りながら、生物や生物現象について理解するとともに、科学的に探究するために必要な観察、実験などに関する基本的な技能を身に付けるとともに、生物や生物現象に主体的に関わり、科学的に探究しようとする態度と、生命を尊重し、自然環境の保全に寄与する態度を養う。					
メディア視聴	事情に応じて許可（東京書籍） ①視聴講座を 100%視聴 ②確認テストクリア		60%	教科書	東京書籍（生物 701）
スクーリング	1 単位時間×16 回	合格時間数 16 時間以上		学習図書	なし
レポート	全 12 回	合格枚数 12 枚		副教材	なし

回	高校通信教育講座 (単元・学習内容)	レポート (提出締切)	スクーリング (日程と内容)	
1	1 編 生物の進化 1 章 生命の起源と細胞の進化 1 節 共通性と多様性をつなぐ進化 A 私たちから最も遠い生物 B 進化が生物にもたらすものの 2 節 生命の誕生 A アミノ酸の合成 ＜資料読解＞ミラーの実験 考えてみよう 生物の体をつくる有機物は、どこでどのように誕生したのか B 核酸やタンパク質の合成 C 細胞の起源 3 節 生物の多様性と地球環境の変化 A 生物の出現と大気組成の変化 ＜資料読解＞大気中の酸素濃度の変化と生物の変遷 考えてみよう どの出来事が大気中の酸素濃度と二酸化炭素濃度に影響を与えたのか B 真核生物の誕生 書いてみよう 化学進化と細胞の進化について、図で整理 ＜コラム＞細胞内共生説の証拠 ＜特集＞生物の変遷	第1回 (5/30)	第1回 第2回	- 進化によって、共通の祖先から無数に枝分かれをして、現在の多様な生物が誕生したことに気づき、進化が生物に何をもたらしたかを考える。 - 系統樹からヒトと最も遠い生物を見だし、その生物との共通点を考える。 - 地球上で生活する生物の多様性は、進化の結果生じたものであることを理解する。 - 原始地球の環境について理解し、生命の起源がどのように誕生したかを考える。 - 原始地球を想定した環境から有機物であるアミノ酸が合成できることを理解する。 - 実験から無機物から有機物が合成できることを理解する。 - 生物を構成する有機物が、どこでどのように誕生したかを考える。 - 核酸の構造について理解する。 - タンパク質の構造を理解し、原始地球で起こった反応についての理解を深める。 - 細胞の起源について理解し、生命の誕生について理解する。 - RNA ワールドから DNA ワールドへの移行について理解を深める。 - 地球上で酸素がどのように生成されたかを理解し、またどのような生物のはたらきによって地球上の酸素濃度が上昇したかを考える。 - 初期の生物の特徴について理解する。 - シアノバクテリアの誕生と酸素濃度上昇についての関係を理解する。 - 大気中の酸素濃度の上昇はどのような生物のはたらきによるものであるか理解を深める。 - 表 a および図 a からどの出来事が大気中の酸素濃度と二酸化炭素濃度に影響を与えたかを考える。 - 細胞内共生説とその根拠について理解する。 - 真核生物誕生についての理解を深める。 - 細胞内共生説の証拠について理解する。 - 生物の変遷についての理解を深める
2	1 編 生物の進化 2 章 遺伝子の変化と進化のしくみ 1 節 遺伝的変異 A 遺伝的変異が生じるしくみ	第2回 (6/15)	第3回	- 同じ種のアサガオの花の色や形がなぜ違うのかを考え、遺伝的変異であることに気付く。 - DNA の塩基配列に変化が生じたときに、形質に変異が起こるしくみを理解する。 - DNA の塩基配列とアミノ酸の対応関係について理解する。

	2 節 多様な遺伝的変異をもたらす有性生殖 A 染色体と遺伝子座 ＜特集＞遺伝の法則 ＜特集＞減数分裂 B 減数分裂で生じる多様な配偶子 C 遺伝子の連鎖と独立 D 乗換えで生じる新しい連鎖と組換え 3 節 進化の定義と自然選択による進化 A 自然選択による進化 ＜コラム＞自然選択の例 ～ガラパゴスフィンチのくちばし～ B 適応進化 ＜コラム＞適応進化の例 ～葉に擬態するチョウやガ～ 4 節 遺伝子レベルでみる進化 A 遺伝子プールと遺伝子頻度 B 自然選択による遺伝子頻度の変化 考えてみよう ネズミの体色の変化 C 遺伝的浮動 D 分子進化と中立進化 ＜コラム＞ハーディ・ワインベルグの法則 5 節 種分化（ A 種とは何か B 種分化のしくみ 書いてみよう 遺伝子の変化と進化のしくみについて、図で整理 C 種多様化のしくみ			・ 遺伝的変異が生じるしくみを理解する。 ・ 遺伝子レベルと染色体レベルで起こる突然変異の違いを理解する。 ・ 染色体レベルで起こる突然変異についての理解を深める。 ・ 同じ親から生まれたイヌのきょうだいの毛色の違いは、突然変異だけで説明できないことに気づく。 ・ 有性生殖の特徴について理解する。 ・ 遺伝の法則について理解する。 ・ 減数分裂について理解を深める。 ・ 減数分裂では多様な配偶子とその組み合わせが生じるため、生殖の結果として遺伝的に多様な個体が生じることを理解する。 ・ 遺伝子の連鎖と独立について理解する。 ・ 変異型の遺伝子のヘテロ接合体である正常体色・正常眼の個体（AaBb）をつくり、黄体色・白眼の変異体（aabb）を交配させたとき、どのような形質の子がどのような割合で生まれてくるかを考え、表aを埋める。 ・ 乗換えで生じる新しい連鎖と組換えについて理解する。 ・ 3つの事例から、進化について考える。 ・ 進化が生じる条件について気づく。 ・ 自然選択による進化が起こる条件について理解する。 ・ 自然選択についてガラパゴスフィンチの例で理解を深める。 ・ 適応進化について理解する。 ・ 適応進化についてチョウやガの例で理解を深める。 ・ 集団中の特定の形質の割合、及びその形質にかかわる対立遺伝子の割合が、世代を経てどのように変化するかを考える。 ・ 遺伝子プールについて理解する。 ・ 遺伝子プールと遺伝子頻度についての理解を深める。 ・ ある生物集団が世代を経たときの遺伝子頻度の変化のようすを、シミュレーションを行い観察し、遺伝子頻度が変化する要因を考察する。 ・ 遺伝子頻度の変動の大きさの違いを見いだす。 ・ 自然選択による遺伝子頻度の変化について理解する。 ・ ネズミの体色の変化について考える。 ・ 遺伝的浮動について理解する。 ・ 分子進化と中立進化の違いを理解する。 ・ ハーディ・ワインベルグの法則を理解する。 ・ 見た目のよく似た生物どうしが別種だと判断されるとき基準について考える。 ・ 種はどのように生じてきたかを考える。 ・ 生殖的隔離を理解し、種とは何かについての理解を深める。 ・ 種分化のしくみについて理解する
3	第3章生物の系統と進化 1 節 生物の系統 A DNAの塩基配列に基づく系統樹 ＜コラム＞分子時計 B 系統の探究 2 節 生物の系統分類 A 生物の分類	第3回 (6/30)	第4回	・ 生物が進化により現在の生活にいたっていることを見いだし、生物の進化の道筋について考える。 ・ 形態や生態的特徴に基づく系統樹と、分子情報に基づく系統樹をそれぞれ作成し比較する。 ・ 生物の系統関係の解明方法について理解を深める。 ・ 塩基配列に基づく系統樹について理解する。 ・ 分子時計についての理解を深める。 ・ 形態の比較、化石の研究から系統の探究について理

B ドメイン 書いてみよう 生物の系統について図で整理 ＜特集＞真核生物の世界 3 節 霊長類のなかのヒト A 霊長類の特徴 B 類人猿とヒトの違い ＜資料読解＞ゴリラとヒトの全身骨格の比較 やってみよう ゴリラの動きを映像で見る 考えてみよう ゴリラとヒトの違いをあげて、その違いがヒトのどのような形質と結びついているかを考える ＜コラム＞霊長類の進化と系統 4 節 人類の出現と変遷 A 初期の人類の特徴 B 原人・旧人の出現 考えてみよう サバンナで暮らしていた人類の社会からどのように現代のヒトの社会へつながっていったのかを考える C ヒトの出現 ＜コラム＞「人種」という概念はもう古い 2 編 生命現象と物質 1 章 細胞と物質 1 節 細胞を構成する成分 A 細胞を構成する成分 ＜特集＞化学の基礎知識 2 節 生体膜のはたらき A 生体膜のはたらきと構造 ＜資料読解＞界面活性剤の構造と作用を考える B 生体膜の透過 書いてみよう 生体膜について、図で整理する ＜コラム＞食作用と飲作用 ＜コラム＞細胞膜での水の移動 3 節 細胞の構造 A 真核細胞の構造とはたらき B 遺伝情報にかかわる構造 C エネルギーの変換にかかわる構造 D タンパク質の合成にかかわる構造 ＜コラム＞細胞小器官を分ける方法 E 細胞分裂や物質の貯蔵にかかわる構造 F 細胞の保護にかかわる構造 G 細胞の形の維持や運動にかかわる構造 ＜コラム＞細胞接着			解する。 ・生物を分類する際、どのような分け方があるかを考える。 ・自分の考えた分け方とほかの人の考えた分け方を比較し、生物学ではどのような分類が採用されているのかを考える。 ・種と種名、階層的分類について理解する。 ・ドメインについて理解する。 ・これまでに学習した用語を使って、生物の系統について整理する。 ・真核生物の世界について理解を深める。 ・ヒトに最も近い現生の動物について考える。 ・霊長類の特徴について理解する。 ・ヒトと類人猿の違いを理解する。 ・ゴリラとヒトの骨格の違いを理解する。 ・骨格による動きの特徴に気づく。 ・ヒトとゴリラの違いをあげて、その違いからヒトの形質について考える。 ・霊長類の進化と系統についての理解を深める。 ・猿人と原人の復元モデルからそれらの違いを見だし、現生のヒトに至るまでに、どのように変遷してきたのかを考える。 ・初期の人類の特徴について理解する。 ・原人、旧人について理解する。 ・サバンナで暮らしていた人類の社会からどのように現代のヒトの社会へつながっていったかを考察する。 ・ヒトの出現について理解する。 ・これまでに学習した用語を使って、人類の進化について整理する。 ・人種という概念について理解する。 ・さつまいもと鶏肉の構成成分から共通点や相違点に気づく。 ・細胞を構成する成分について理解する。 ・細胞が、水、タンパク質、核酸、炭水化物、脂質、無機物などの成分によって構成されていることを理解する。 ・レタスに食塩を振りかけたときの反応について考える。 ・生体膜のはたらきと構造について理解する。 ・界面活性剤の構造と作用について理解を深める。 ・生体膜の透過について理解する。 ・これまでに学習した用語を使って、生体膜について整理する。 ・食作用と飲作用の違いについて理解する。 ・細胞膜での水の移動について理解を深める。 ・電子顕微鏡写真から、細胞小器官を探し、はたらきについて考える。 ・真核細胞の構造とはたらきについて理解する。 ・遺伝情報にかかわる構造について理解する。 ・エネルギーの変換にかかわる構造について理解する。 ・タンパク質の合成にかかわる構造について理解する。 ・細胞分画法について理解する。 ・大隅良典のノーベル賞受賞当時の新聞記事などを調べ、内容について整理する。 ・細胞分裂や物質の貯蔵にかかわる構造について理解する。 ・細胞の保護にかかわる構造について理解する。
---	--	--	--

				・細胞の形の維持や運動にかかわる構造について理解する。 ・細胞接着について理解する。
4	4 節 タンパク質の構造 A タンパク質の構造 <コラム>タンパク質の構造の表示法 B タンパク質のフォールディングと変性 やってみよう 卵白の変化について説明する <コラム>タンパク質の修飾とはたらき <コラム>プリオン病 5 節 酵素としてはたらくタンパク質 A 活性化エネルギーと酵素 B 活性部位と基質特異性 やってみよう だ液のアミラーゼがタンパク質を分解できない理由を説明する C 酵素の反応速度 <資料読解>酵素濃度や基質濃度と反応の関係 D 酵素の活性と変性 E 酵素反応の阻害 F 補酵素と金属 調べてみよう 酵素としてはたらく物質には、タンパク質 以外にどのような物質が含まれているか、調べてみる G 酵素反応の調節 やってみよう 酵素反応の促進や抑制は、どのように調節されているのかまとめてみる <コラム>さまざまな酵素のはたらき やってみよう ヒトの体内に存在する酵素や、産業で利用されている酵素を調べる 6 節 生命現象とタンパク質 A 生体膜での輸送 B 細胞間の情報伝達 書いてみよう タンパク質について、図で整理 <コラム>免疫細胞の情報伝達にかかわるタンパク質	第4回 (7/15)	第5回	・生卵を加熱して目玉焼きをつくる際にみられる変化から、タンパク質の性質を見だし、構造について考える。 ・アミノ酸の構造、タンパク質の構造について理解する。 ・タンパク質の構造の表示方法について理解する。 ・タンパク質のフォールディングと変性について理解する。 ・卵白の変化について図8を見ながら説明する。 ・タンパク質の修飾とはたらきについて理解を深める。 ・異常型のプリオンタンパク質が伝播するしくみおよびプリオン病について理解する。 ・体内でどのような酵素がはたらくているかを考える。 ・体内ではたらく酵素の場所や性質について調べる。 ・活性化エネルギーと酵素について理解する。 ・活性部位と基質特異性について理解する。 ・基質特異性からアミラーゼがタンパク質を分解できない理由を見だし説明をする。 ・基質濃度と反応速度の関係について理解する。 ・酵素の反応速度の特徴について理解する。 ・酵素濃度や基質濃度と反応の関係についての理解を深める。 ・化学反応と酵素がかかわる化学反応の違いを理解する。 ・ブタのレバー（肝臓）に含まれるカタラーゼという酵素の性質を調べる。 ・酵素の溶液を酸性・中性・塩基性としたとき、どのような反応がみられるか仮説を立てて、それを検証する実験方法を考えて発表する。 ・酵素反応の阻害について理解する。 ・補酵素と金属についてそのはたらきを理解する。 ・酵素としてはたらく物質には、タンパク質以外にどのような物質があるかを調べる。 ・酵素反応の調節について理解する。 ・酵素反応の調節について調べ、まとめる。 ・さまざまな酵素のはたらきについて理解を深める。 ・ヒトの体内に存在する酵素や産業で利用されている酵素について調べ発表する。 ・1日の生活のなかの生命現象にタンパク質がどのようにかかわっているかを考える。 ・生体膜での物質の輸送について理解する。 ・チャネル、担体、ポンプのはたらきについて理解する。 ・細胞間でどのように情報が伝達されるかを理解する。 ・ここまで学習した用語を使って、タンパク質について図で整理する。 ・免疫細胞の情報伝達にかかわるタンパク質を理解する。 ・自然免疫、適応免疫の場合それぞれの情報伝達について理解を深める。

5	第2章代謝とエネルギー 1節 代謝とエネルギー A 化学反応とエネルギー やってみよう 酵素と活性化エネルギーの関係を振り返って整理する B 代謝とATP ＜コラム＞酸化還元反応と補酵素 2節 呼吸 A 呼吸の反応経路と反応の場合 B 解糖系 C クエン酸回路 D 電子伝達系 E 呼吸全体でのATPの収率 書いてみよう 呼吸について、図で整理 ＜コラム＞脂肪とタンパク質を基質とする呼吸経路 ＜コラム＞ATP合成酵素の回転 3節 発酵 A 発酵と呼吸の違い B 発酵の種類 実験2 アルコール発酵 ＜コラム＞発酵と呼吸の切り替え 4節 光合成 A 光合成反応の過程と反応の場合 B チラコイドでの反応～光合成の第一段階～ ＜コラム＞光化学系の構造 ＜コラム＞光合成色素の光吸収とエネルギーのゆくえ やってみよう 呼吸における電子伝達系との相違点と共通点をあげる C ストロマでの反応～光合成の第二段階～ ＜コラム＞C₄植物とCAM植物 ＜コラム＞化学合成	第5回 (7/30)	第6回 第7回	・生物がエネルギーを獲得し、利用するしくみを考える。 ・太陽光パネルや懐中電灯など、身のまわりのものと比較し、その違いについて考える。 ・化学反応とエネルギーについて理解する。 ・酵素と活性化エネルギーの関係について整理する。 ・代謝とATPについて理解する。 ・酸化還元反応と補酵素について理解を深める。 ・ハチドリとヘリコプターを比較して、エネルギーの利用や取り出し方の相違点や共通点を考える。 ・呼吸の反応経路と反応の場合について理解する。 ・解糖系、クエン酸回路、電子伝達系について理解する。 ・解糖系でどのようにATPが合成されるか理解する。 ・解糖系の流れを理解し、またどのような生成物があるかを理解する。 ・解糖系におけるエネルギーの変化を理解する。 ・解糖系におけるエネルギーの流れを考える。 ・クエン酸回路の流れについて理解する。 ・クエン酸回路でATPがどのように合成されるか理解する。 ・クエン酸回路の、コハク酸脱水素酵素のはたらきを、メチレンブルーの色の変化を利用して観察する。 ・電子伝達系について理解する。 ・呼吸全体でのATPの収率について理解する。 ・学習した用語を使って、呼吸について図で整理する。 ・脂肪とタンパク質を基質とする呼吸経路の理解を深める。 ・ATP合成酵素についての理解を深める。 ・乳酸菌や酵母が、酸素が少ない呼吸のできない環境でどのようにエネルギーを取り出しているのかを考える。 ・発酵と呼吸の違いについて理解する。 ・発酵の種類について理解する。 ・酵母がグルコースを分解するようすを観察する。 ・発酵と呼吸の切り替えについて理解する。 ・植物工場で、青色と赤色の光を照射していることが多い理由について考える。 ・光合成反応の過程と反応の場合について理解する。 ・チラコイドでの反応について理解する。 ・光合成色素の抽出と分離を行い、色素を観察する。 ・光化学系の構造についての理解を深める。 ・光合成色素の光吸収とエネルギーについて理解を深める。 ・呼吸電子伝達系との相違点と共通点を考え、まとめる。 ・ストロマでの反応について理解する。 ・C₄植物とCAM植物について理解する。 ・化学合成についての理解を深める。
6	第3編遺伝情報の発現と発生 1章遺伝子情報とその発現 1節 DNAの構造 A DNAの二重らせん構造と方向性 2節 DNAの複製 A DNAの複製の過程 3節 遺伝情報の流れ A 遺伝情報の流れ	第6回 (8/15)	第8回	・正確な複製を可能にするDNAの化学的な特徴や構造はどのようなものか、特定の塩基の対とは何かを考える。 ・DNAの二重らせん構造について理解する。 ・DNAの方向性について理解する。 ・DNAの2本鎖は互いに逆向きに並び、塩基対を形成し、二重らせん構造をとっていることを理解する。 ・電子顕微鏡写真からDNAの複製バブルを探す。 ・複製バブルがその後、どのように変化するかを考える。

	4 節 RNA と転写 A RNA の構造と種類 B 転写のしくみ <発展>セントラルドグマと異なる遺伝情報の流れ C 真核生物の RNA の加工 <発展>キャップ構造とポリ A テール 5 節 翻訳のしくみ A コドンと遺伝暗号表 B 翻訳のしくみ C 原核生物のタンパク質合成 書いてみよう セントラルドグマについて、図で整理 <資料読解>ニーレンバーグとマティの実験・コロナの実験 考えてみよう ACA, CAC はどのアミノ酸を指定するか 6 節 遺伝情報の変化 A 突然変異とアミノ酸配列 B DNA 多型 <コラム>DNA を傷付けるもの <発展> DNA の修復と突然変異			る。 ・メセルソンとスタールの実験から DNA の半保存的複製についての理解を深める ・DNA のモデル図について、メセルソンとスタールの実験を参考に考える。 ・DNA の複製の過程について理解する。 ・大腸菌に注入されたのは DNA だけなのに、なぜバクテリオファージは増殖するのかを考える。 ・遺伝情報に基づくタンパク質の合成には、どのような過程があるのかを考える。 ・セントラルドグマについて理解する。 ・電子顕微鏡写真から転写の方向について考える。 ・長さが違う RNA が観察されることから、その理由について考える。 ・RNA の構造と種類、おもなはたらきについて理解する。 ・転写のしくみについて理解する。 ・セントラルドグマと異なる遺伝情報の流れについての理解を深める。 ・真核生物の遺伝子の構造と RNA のスプライシングについて理解する。 ・選択的スプライシングについて理解する。 ・キャップ構造とポリ A テールについて理解する。 ・人工的なタンパク質の系は、微生物の中でどのようにして合成されるのかを考える。 ・コドンと遺伝暗号表について理解する。 ・tRNA のはたらきについて理解する。 ・翻訳の過程について理解する。 ・原核生物のタンパク質合成について理解する。 ・これまでに学習した用語を使って、セントラルドグマについて図で整理する。 ・ニーレンバーグとマティの実験について理解する。 ・コロナの実験について理解する。 ・実験 1, 2 の結果から、ACA, CAC はどのアミノ酸を指定すると考えられるか理解する。 ・かま状赤血球の例から、塩基配列がタンパク質にどのような影響を及ぼすかを考える。 ・突然変異とアミノ酸配列について理解する。 ・DNA 多型について理解する。 ・DNA を傷付けるものについて理解する。 ・DNA の修復と突然変異について理解を深める。
7	3 編 遺伝情報の発現と発生 2 章 発生と遺伝子発現 1 節 原核生物の遺伝子発現の調節 A 大腸菌と培地 B 大腸菌の環境に対する応答 C 原核生物の基本的な転写調節 <コラム>オペロン説の提唱につながった大腸菌変異株の発見 考えてみよう 大腸菌変異株での lacZ の発現はどのように説明できるか <コラム>トリプトファンオペロンとアラビノースオペロン 2 節 真核生物の遺伝子発現	第 7 回 (8/30)	第 9 回	・大腸菌のコロニーが青色になった理由を考える。 ・大腸菌と培地について理解する。 ・大腸菌の環境に対する応答を理解する。 ・大腸菌の生育環境と lacZ 遺伝子の発現にはどのような関連があるかを、コロニーの色を指標にして調べる。 ・原核生物の基本的な転写調節について理解する。 ・オペロン説の提唱につながった大腸菌変異株の発見について理解する。 ・大腸菌変異株での lacZ の発現はどのように説明できるか考える。 ・トリプトファンオペロンとアラビノースオペロンについて理解する。 ・DNA の長さについて知り、どのように核の中に納まっているのかを考える。 ・真核生物の遺伝子発現の調節について理解する。 ・細胞外の環境に応じた遺伝子発現の調節について理解する。 ・ヒトの体を構成する細胞の数と種類を知り、それが

の調節 A 真核生物の遺伝子発現の調節 B 細胞外の環境に応じた遺伝子発現の調節 3節 選択的遺伝子発現と細胞分化 A 分化した細胞の遺伝子発現 B 遺伝子発現の調節の変化と細胞の分化 <コラム> iPS細胞の誕生につながった選択的遺伝子発現の考え方 4節 動物の発生 A 動物の配偶子形成 B 卵と精子 C 受精 D ウニの発生 E カエルの発生 調べてみよう 受精卵が幼生になるまでにかかる時間 <資料読解> 動物の発生の共通点 考えてみよう ウニとカエルの発生と共通点 <コラム> 発生初期の特徴 <コラム> 脊椎動物の胚葉の分化と器官形成 5節 胚の細胞の発生運命と遺伝子発現 A 原腸形成での細胞の動きと発生運命 考えてみよう 原基分布図からわかること B 原基分布図と細胞分化 C 細胞分化と遺伝子発現 考えてみよう 移植片の遺伝子発現のパターン 6節 発生現象と遺伝子発現の調節 A 細胞質決定因子 B カエルの受精でみられる卵の細胞質の配置換えと背腹の決定 <コラム> 背側または腹側だけで発現する遺伝子 C ショウジョウバエの前方部の決定 D 誘導 <コラム> 中胚葉誘導と遺伝子発現 <コラム> 形成体のはたらきを担う遺伝子 E 誘導の連鎖 <コラム> 肢芽ではたらく分泌タンパク質と遺伝子 <コラム> アポトーシス 7節 動物の形と調節遺伝子の発現		どのようにしてできるのかを考える。 ・分化した細胞の遺伝子発現について理解する。 ・遺伝子発現の調節の変化と細胞の分化について理解する。 ・遺伝子発現の考え方について理解を深める。 ・iPS細胞の誕生について理解する。 ・1個の受精卵からどのように、おたまじゃくしに、そして成体に変化するのかを考える。 ・動物の配偶子形成について理解する。 ・卵と精子について理解する。 ・受精について理解する。 ・受精後から胞胚期について理解する。 ・原腸形成から幼生について理解する。 ・幼生から成体について理解する。 ・受精から胞胚期について理解する。 ・原腸胚期について理解する。 ・神経胚期から尾芽胚期について理解する。 ・尾芽胚期から成体について理解する。 ・受精卵が幼生になるまでにかかる時間について調べる。 ・動物発生の共通点についての理解を深める。 ・ウニとカエルの発生についてその共通点を見いだす。 ・発生初期の特徴について理解する。 ・脊椎動物の胚葉の分化と器官形成について理解する。 ・写真から胚の各部分が成体のどの部分になるのかは、いつごろから、どのように決まっていくのか考える。 ・原腸形成での細胞の動きと発生運命について理解する。 ・原基分布図からわかることについて考える。 ・原基分布図と細胞分化について理解する。 ・細胞分化と遺伝子発現について考える。 ・移植片の遺伝子発現のパターンについて考える。 ・写真の胚の実験では何が起こったのかを考える。 ・細胞質決定因子について理解する。 ・カエルの受精でみられる卵の細胞質の配置換えと背腹の決定について理解する。 ・背側または腹側だけで発現する遺伝子について理解する。 ・ショウジョウバエの前方部の決定について理解する。 ・誘導について理解する。 ・中胚葉誘導と遺伝子発現について理解する。 ・形成体のはたらきを担う遺伝子について理解する。 ・誘導の連鎖について理解する。 ・肢芽ではたらく分泌タンパク質と遺伝子について理解する。 ・アポトーシスについて理解する。 ・キイロショウジョウバエの突然変異について考える。 ・動物の体の形を決める遺伝子について理解する。 ・ホメオティック遺伝子とホックス遺伝子について理解する。 ・動物の形づくりとホックス遺伝子について理解する。 ・遺伝子の発現調節について図で整理する。 ・ホックス遺伝子と脊椎動物の形について理解する。
---	--	---

	A 動物の体の形を決める遺伝子 <コラム> ホメオティック遺伝子とホックス遺伝子 B 動物の形づくりとホックス遺伝子 書いてみよう 遺伝子の発現調節について図で整理 <資料読解> ホックス遺伝子と脊椎動物の形 3 編 遺伝情報の発現と発生 3章 遺伝子を扱う技術			
8	1 節 遺伝子を増幅する技術 A 制限酵素による DNA の切断 B DNA クローニング C ポリメラーゼ連鎖反応 考えてみよう 温度変化サイクルを 30 回繰り返すと、理論上、DNA を何倍に増幅できるか <発展> プライマーの設計 2 節 塩基配列を解読する技術 (A 電気泳動 考えてみよう 口腔粘膜上皮の細胞でなぜ ALDH2 遺伝子が調べられるか。 B サンガー法 (ジデオキシ法) C ゲノムプロジェクト <コラム> 一塩基多型 (SNP) を利用した投薬 3 節 遺伝子組換え技術の利用 A 大腸菌への遺伝子導入 <コラム> 哺乳類の培養細胞を用いた医薬品の生産 B 生物個体への遺伝子導入 <コラム> ノックアウトマウス <資料読解> 大腸菌の遺伝子組換え実験 <コラム> オワンクラゲの緑色蛍光タンパク質 (GFP) の遺伝子 4 節 遺伝子や細胞を扱う技術の課題 A 遺伝子や細胞を扱う技術の課題 <資料読解> 遺伝子を扱う技術の光と影 やってみよう 遺伝子や細胞を扱う技術の課題	第8回 (9/15)	第10回	・1本のまつ毛から個人を識別する方法について考える。 ・制限酵素による DNA の切断について理解する。 ・DNA クローニングについて理解する。 ・ポリメラーゼ連鎖反応について理解する。 ・温度変化サイクルによって、理論上、DNA を何倍に増幅できるかを考える。 ・プライマーの設計についての理解を深める。 ・お酒に強い人と弱い人で、何が異なるのかを考える。 ・電気泳動のしくみについて理解する。 ・口腔粘膜上皮の細胞でなぜ ALDH2 遺伝子が調べられるかを考える。 ・サンガー法について理解する。 ・ゲノムプロジェクトについて理解する。 ・一塩基多型 (SNP) を利用した投薬について理解する。 ・遺伝子組換え技術はどのように利用されているのか考える。 ・大腸菌への遺伝子導入について理解する。 ・哺乳類の培養細胞を用いた医薬品の生産について理解を深める。 ・生物個体への遺伝子導入について理解する。 ・ノックアウトマウスについて理解する。 ・大腸菌に緑色蛍光タンパク質 (GFP) の遺伝子をもつプラスミドを導入し、「光る大腸菌」をつくることで遺伝子組換えのしくみを理解する。 ・オワンクラゲの緑色蛍光タンパク質 (GFP) の遺伝子について理解する。 ・だれもが健康診断のように遺伝子診断を受けることができるようになると、どのような利点や問題が生じるのか考える。 ・市販されている遺伝子診断キットについて調べてみる。 ・遺伝子や細胞を扱う技術の課題について理解する。 ・遺伝子を扱う技術の光と影について理解を深める。 ・遺伝子や細胞を扱う技術の課題について、自分の考えをまとめる。
9	第4編 生物の環境応答 1章 動物の刺激の受容と反応 1 節 刺激の受容から反応への流れ やってみよう 反応テストを行う	第9回 (9/30)	第11回	・ゴールキーパーがボールに反応するしくみを考える。 ・反応テストを行い、色の変化の情報の伝わり方について考えてみる。 ・情報の伝達と反応について理解する。 ・ニューロンについて理解する。

	A 情報の伝達と反応 B ニューロン 2 節 ニューロンの興奮 A 静止電位と活動電位 B 全か無かの法則 3 節 興奮の伝導 A 興奮の伝導 B 跳躍伝導 ＜コラム＞巨大な神経繊維をもつイカ 4 節 興奮の伝達 A シナプスと情報の伝達 ＜コラム＞電気シナプスと化学シナプス 5 節 刺激の受容と感覚 A 光刺激の受容 B 視細胞 C 眼の調節 ＜コラム＞聴覚器としての耳 ＜特集＞さまざまな受容器 6 節 中枢神経系での情報処理 A 中枢神経系 やってみよう 巻末付録の「脳アトラス」を組み立てる。 B 反射 考えてみよう 熱という情報の伝わり方 7 節 効果器 A 筋肉の構造 B 筋収縮のコントロール 書いてみよう 動物の刺激の受容と反応について、図で整理			・カエルのあしの筋肉には何が起きていたのかを考える。 ・静止電位と活動電位について理解する。 ・全か無かの法則について理解する。 ・1つのニューロンについて、活動電位を計測した結果から、どこで最初に活動電位が発生したかを考える。 ・興奮の伝導について理解する。 ・跳躍伝導について理解する。 ・巨大な神経繊維をもつイカについて理解する。 ・とまり合ったニューロン間では、細胞膜は直接つながっていないことを見だし、どのようなしくみで興奮が伝わるのかを考える。 ・シナプスと情報の伝達のしくみを理解する。 ・電気シナプスと化学シナプスについて理解する。 ・動物は刺激を受容器によって受容していることを理解する。 ・食べ物を前にしたとき、ヒトではどのような刺激を、どの受容器から受け取っているのかを考える。 ・光刺激の受容と感覚について理解する。 ・視細胞について理解する。 ・眼に関する実験を行い、眼の特性について考える。 ・明順応と暗順応について理解する。 ・遠近の調節について理解する。 ・聴覚器としての耳について理解を深める。 ・さまざまな受容器について理解を深める。 ・脊椎動物の脳はどのように進化してきたのかを考える。 ・中枢神経系について理解する。 ・巻末付録の「脳アトラス」を組み立てて、脳の構造について、立体的にみる。 ・反射について理解する。 ・熱という情報がどのように伝わるかを考える。 ・身のまわりから、伸び縮みするものを集めてみる。 ・筋肉が収縮するしくみに似ているものはどれか考える。 ・筋肉の構造について理解する。 ・筋収縮のコントロールについて理解する。 ・これまでに学習した用語を使って、動物の刺激の受容と反応について図で整理する。
10	2章動物の行動 1 節 動物の行動とは A 動物の行動をめぐる4つのなぜ 考えてみよう コイの水面近くまで浮上する行動 B 行動発現のしくみ C 行動の生得的な要素と習得的な要素 2 節 刺激の受容と行動 A フェロモンと走性 ＜資料読解＞カイコガの神経系と行動の関係 考えてみよう カイコガの行動の中枢 B 行動の神経メカニズム ＜コラム＞カはどのようにヒトを探しあてるのか ＜発展＞遺伝子工学による神経系の操作技術	第10回 (10/15)	第12回 第13回	・身近な動物は、いつ、どのような行動をしているかを調べてみる。 ・動物の行動をめぐる4つのなぜについて理解する。 ・コイが水面近くまで浮上する行動について考える。 ・行動発現のしくみについて理解する。 ・行動の生得的な要素と習得的な要素について理解する。 ・雄のガは、どのようにして雌の居場所がわかったのかを考える。 ・フェロモンと走性について理解する。 ・雄カイコガの行動を観察し、性フェロモンを受容する器官を調べる。 ・カイコガの神経系と行動の関係について理解を深める。 ・カイコガの行動中枢について考える。 ・行動の神経メカニズムについて理解する。 ・カがヒトを探しあてるメカニズムについて理解する。 ・遺伝子工学による神経系の操作技術について理解する。

<コラム>神経科学における移動ロボットの利用 3 節 学習のしくみ <資料読解>えら引っ込め反射のメカニズムを考える A 慣れの神経メカニズム B 脱慣れと鋭敏化 C 古典的条件付け 考えてみよう 条件刺激と無条件刺激 書いてみよう 動物の行動について、図で整理 <コラム>動物の知覚を調べる手法 考えてみよう 昆虫が色を知覚できるかの実験計画 3 章植物音環境応答 1 節 被子植物の生殖と発生 A 被子植物の配偶子形成と受精 B 被子植物の胚の発生 2 節 植物の一生の出来事と環境の影響 やってみよう 植物の一生をたどり、まとめる A 植物を取り巻く環境要因 3 節 植物ホルモンと光受容体 実習7 リンゴの果実が植物の芽生えに与える影響 やってみよう 植物の芽生えに与える影響 A 植物ホルモン B 光受容体 4 節 環境要因による発芽の調節 A 種子の休眠と発芽 B 光による発芽の調節 C 温度による発芽の調節 実験6 種子の発芽と光の影響 D 発芽の調節と植物ホルモン <コラム>ジベレリンの発見 <コラム>ジベレリンの受容体と情報伝達 5 節 茎や根の成長と環境要因の影響 A 茎の伸長成長と肥大成長の調節 B 根の成長の調節 C 屈性と傾性 <コラム>光屈性の研究の歴史 考えてみよう ヒマワリの芽生えと光に対する反応 D 頂芽優勢 6 節 気孔の開閉の調節と環境要因の影響（			・神経科学における移動ロボットの利用について理解する。 ・カンデルはなぜアメフラシを実験の対象として選んだのかを考える。 ・えら引っ込め反射のメカニズムについて理解する。 ・慣れの神経メカニズムについて理解する。 ・脱慣れと鋭敏化について理解する。 ・古典的条件付けについて理解する。 ・条件刺激と無条件刺激について考える。 ・これまでに学習した用語を使って、動物の行動について、図で整理する。 ・動物の知覚を調べる手法を理解する。 ・昆虫が色を知覚できるかの実験計画について考える。 ・被子植物の成長はどこで起こり、どのような器官がどこに形成されるのかを考える。 ・被子植物の配偶子形成と受精について理解する。 ・被子植物の胚の発生について理解する。 ・種子から枯死までの植物の一生について考える。 ・植物の一生をたどりまとめる。 ・植物を取り巻く環境要因について理解する。 ・根が水に覆われてから、葉が下を向くまでに、植物体内ではどのようなことが起こっているのかを考える。 ・リンゴの果実が植物の芽生えに与える影響を調べる ・すりおろしたリンゴの果実と一緒に入れたとき、一緒に入れるリンゴの果実をビニル袋で覆ったとき、クリアケースのふたを外したまま実験をしたときの植物の芽生えに与える影響について調べる。 ・植物ホルモンについて理解する。 ・光受容体について理解する。 ・たいていの種子は密閉された同じ袋で売られていることを見だし、その理由について考える。 ・植物種によって異なる点や共通する点を考える。 ・種子の休眠と発芽について理解する。 ・光による発芽の調節について理解する。 ・温度による発芽の調節について理解する。 ・レタスの種子の発芽に、光が影響することを確認する。 ・発芽の調節と植物ホルモンについて理解する。 ・ジベレリンの発見について知る。 ・ジベレリンの受容体と情報伝達について理解を深める。 ・植物の姿や形は、どのような環境要因でどのように変わるのかを考える。 ・茎の伸長成長と肥大成長の調節について理解する。 ・根の成長の調節について理解する。 ・屈性と傾性について理解する。 ・光屈性の研究の歴史について理解を深める。 ・ヒマワリの芽生えと光に対する反応について考える。 ・頂芽優勢について理解する。 ・植物の気孔が、夜間は閉じていて、朝になると開く理由について考える。 ・気孔の開閉のしくみと環境の変化について理解する。 ・青色光による孔辺細胞の浸透圧の上昇への理解を深める。 ・水を与えたツバキの葉の気孔と、水を長時間与えなかった葉の気孔のようすを観察する。
---	--	--	--

	A 気孔の開閉のしくみと環境の変化 <コラム> 青色光による孔辺細胞の浸透圧の上昇 考えてみよう 水草の葉が気孔をもたない理由 <コラム> 植物体内の水の移動 7 節 花芽形成と環境要因の影響 A 花芽形成と日長の関係 B 花成ホルモンとそのはたらき やってみよう 電照栽培について調べる <コラム> 花成ホルモンの実体の解明 C 花芽形成に影響を及ぼすその他の要因 <発展> 生物時計と光周性の花芽形成 <コラム> 花の形態形成とABCモデル 8 節 果実の形成と成熟のしくみ A 果実の形成・成長と植物ホルモン B 果実の成熟と植物ホルモン <コラム> 植物ホルモンの農業への応用 9 節 器官の老化と脱落のしくみ A 葉の老化と脱落 書いてみよう 植物の環境応答について図で整理 実験8 ツバキの葉の脱落の観察			・水草の葉が気孔をもたない理由について考える。 ・植物体内の水の移動について理解する。 ・被子植物の開花時期は、種によって異なることを見だし、開花時期は環境要因の関係を考える。 ・花芽形成と日長の関係について理解する。 ・花成ホルモンとそのはたらきについて理解する。 ・電照栽培について調べる。 ・花成ホルモンの実体の解明について理解する。 ・花芽形成に影響を及ぼすその他の要因について理解する。 ・生物時計と光周性の花芽形成について理解を深める。 ・花の形態形成とABCモデルについて理解する。 ・果実は何をきっかけに、どの部分が変化してできるのかを考える。 ・果実の形成・成長と植物ホルモンについて理解する。 ・果実の成熟と植物ホルモンについて理解する。 ・植物ホルモンの農業への応用について理解する。 ・葉はどのようなときに落ち、それにはどういう意味があるのか考える。 ・葉の老化と脱落について理解する。 ・今まで学習した用語を使って、植物の環境応答について図で整理する。 ・葉の付いたツバキの枝とリンゴの果実を一緒に入れておくと、ツバキの葉はどうなるかを観察する。
11	第5編生態と環境 1章 個体群と生物群集 1節 生態系からみた生物 A 減少する生物 B 増え過ぎる生物 2節 個体群と環境 A 個体群どうしのかかわり B 個体群の大きさと個体群密度 C 個体の分布 やってみよう 個体群の大きさの測定 やってみよう 生態図を図示してみよう <コラム> 区画法と標識再捕法 3節 個体群の構造と成長 A 密度効果 B 種内競争 C 相変異 D 個体群密度の変動 <コラム> カラマツアミメ	第11回 (10/30)	第14回	・ニホンウナギを題材に、生物の個体数の変動について考え、その理由やもたらす影響について考察する。 ・日本及び世界で個体数が減少している生物について理解する。 ・個体数の把握が種の多様性の維持にとって重要であることを理解する。 ・人間活動の影響により、個体数が減少している生物ばかりではなく、増え過ぎている生物が存在することを理解する。 ・複数の生物が映る写真を見て、それぞれの生物の個体数を考えることで、個体群の考え方を意識する。 ・個体群のなかの個体どうしの関係や、異なる個体群どうしの関係があることについて理解する。 ・個体群密度の考え方とその測定方法について理解する。 ・個体群のなかでの個体の分布様式には、集中分布、一様分布、ランダム分布があることを理解する。 ・個体の分布様式によって、個体群の大きさの測定方法に違いがあることを理解する。 ・さまざまな生物の個体群どうしの関係や、非生物

	ハマキの個体群密度 <コラム> 個体の移動による個体群の存続 E 生命表と生存曲線 F 個体群の年齢構成 <コラム> 産卵数と卵の大きさ 4 節 個体間の相互作用 A 群れ B 縄張り <資料読解> アユの縄張りの大きさ 考えてみよう 縄張りについて考える C 順位制とつがい関係 D 共同繁殖 E 社会性昆虫 <コラム> アリー効果と個体群の成長 5 節 種間の相互作用 A 競争 <コラム> 春植物の競争回避 B 捕食と被食 実習 9 被食・捕食の関係と個体数の変動 C 擬態 6 節 生物群集の成り立ちと多種の共存 A 生態的地位(ニッチ)とその分割 <コラム> 資源利用曲線と共存 B 多種の共存がもたらす捕食 C 攪乱がもたらす共存 考えてみよう D 食物連鎖を通じた間接的な関係 書いてみよう 個体群と生物群集について、図で整理 <コラム> 病原体が生物群集に与える影響 5 編 生態と環境 2 章 生態系の物質生産と物質循環		環境とのかかわりを図に表す。 ・区画法や標識再補法による個体数の推定方法を理解する。 ・バッタが大量発生したときの報道写真をもとに、大量発生が個体群の急激な増加であることに気づく。 ・個体群の成長は成長曲線の形をとることを理解する。 ・個体群の成長は環境収容力で安定した値に落ち着くことを理解する。 ・ハツカダイコンを異なる密度で成長させたとき、個体の性質が個体群密度によって異なることに気づく。 ・個体群密度によって個体の性質が異なるのは、密度効果による影響であることを理解する。 ・同じ種の個体間でみられる競争について理解する。 ・個体群密度の変化によって、世代を経て個体の性質に変化が生じる 場合があることを理解する。 ・バッタの群生相と孤独相について、相変異が不安定な環境への適応であることを理解する。 ・野外における個体群密度は、周期的に変動することを理解する。 ・カラマツアミメハマキの個体群密度の周期変動について理解を深める。 ・集中分布する生物について、個体の移動が個体群の維持に役立っていることを理解する。 ・生命表について理解する。 ・生命表をグラフにした生存曲線について、種によって大きく3つの型に分類できることを理解する。 ・生存曲線の3つの型について、その生物の生態的な特徴と合わせて理解する。 ・個体群における世代や年代ごとの個体数の分布が、ピラミッド型で表せることを理解する。 ・年齢構成のピラミッドが個体群の特徴を表していることを理解する。 ・産卵数と卵の大きさに相関があることについて理解を深める。 ・群れをつくる動物をあげ、群れをつくるにはさまざまな理由があることに気づく。 ・群れをつくることによる利益と不利益を理解する。 ・群れの大きさの決まり方は利益と不利益のバランスによることを理解する。 ・動物のなかには縄張りをもつ生物がいることを理解する。 ・縄張りをもつことによる利点を理解する。 ・縄張りの大きさが、縄張りから得られる食物の量と縄張りを守る労力のバランスによって決まることを、資料を基に読み解く。 ・縄張りの大きさと利益について考える。 ・ある種の生物の群れでは、順位制やつがいなどの関係が築かれることを理解する。 ・ある種の生物の群れでは、共同繁殖などの繁殖様式が見られることを理解する。 ・社会性昆虫の特徴について理解する。 ・アリー効果について理解する。 ・個体数が一定以上少なくなると、その個体群が消滅する危機が高まることについて理解を深める。 ・「ライオンとハイエナ」「ミツバチとタンポポ」の関係から、生物は異なる種間にも密接なかかわりがあることに気づく。 ・異なる種間でも、さまざまな資源をめぐる種間競
--	--	--	---

				争が生じること を理解する。 ・競争的排除について理解する。 ・春植物が光をめぐる競争を回避する生態的特徴をもっていることを理解する。 ・被食者と捕食者の数の変化には、周期性が見られることに気づく。 ・生物の個体群間の相互作用について考察し、生物群集が維持されるしくみや個体群間の関係性を見いだして理解する。 ・いくつかの生物にみられる擬態も、個体群間の関係により形態や行動に適応が生じた結果であることを理解する。 ・種間関係のうち、双方に利益をもたらす関係を相利共生ということ を理解する。 ・共生や寄生の関係は、環境によって変化することを理解する。 ・多種の生物が共存しているサンゴ礁の写真を題材に、自然界では多様な生物がかかわり合って存在していることに気づく。 ・生態的地位（ニッチ）について理解する。 ・時間的・空間的なすみわけについて理解する。 ・多種の生物の共存とすみわけの関係を理解する。 ・身の回りの生物の生息場所を調べ、生態的地位やすみわけについて理解を深める。 ・資源利用曲線と種間競争の強弱の関係について理解する。 ・捕食者の存在によって、多種の生物が共存できるしくみを理解する。 ・キーストーン種について理解する。 ・中規模攪乱説について理解する。 ・攪乱が強いときと弱いときで、生物群集を構成する生物の違いについて考え、理解を深める。 ・間接効果について理解する。 ・これまでに学習した用語を使って、個体群と生物群集について整理する。 ・病原体が生物群集に与える影響について理解する。
12	1 節 食物網と物質生産 A 生態系を流れるエネルギー B 炭素の循環 C 窒素の循環 ＜コラム＞生態系のなかでの放射性セシウムの流れ 2 節 生態系の物質収支と生態ピラミッド A 生産者の物質収支 B 森林生態系の物質収支 ＜コラム＞生産構造図 C バイオームと生産量、現存量 D エネルギーの効率 E 消費者の物質収支と生態ピラミッド 5 編 生態と環境 3 章 生態系と人間生活 3 章 p 生態系と人間生活 1 節 生物多様性 A 種の多様性 B 遺伝的多様性 C 生態系の多様性	第 12 回 最終提出： (11/30) 提出予備日： (1/15)	第 15 回 第 16 回	・森林の食物網と海洋の食物網を比較し、共通点や相違点に気づく。 ・物質生産について理解する。 ・生態系全体のエネルギーの流れについて理解する。 ・炭素は生態系を循環していることを理解する。 ・生態系全体の炭素の流れについて理解する。 ・人間活動により、固定された炭素が放出され、二酸化炭素が増えていることを理解する。 ・窒素は生態系を循環していることを理解する。 ・生態系全体の窒素の流れについて理解する。 ・窒素固定について理解する。 ・福島第一原子力発電所の事故により放出された放射性セシウムが、生態系のなかで生物のはたらきにより移動していることを理解する。 ・生態ピラミッドから、栄養段階が上がるほど個体数が減少する傾向があることに気づく。 ・生産者の物質収支について、用語の意味と関係を理解する。 ・森林の物質収支の特徴を理解する。 ・生産構造図について理解する。 ・植物体の形状と生産構造図との関連について理解を深める。 ・バイオームごとの純生産量と現存量の関係や特徴を理解する。

	2 節 人間社会の変化と生態系 A 窒素やリンの利用の増加 実習 10 肥料の中の窒素の流出 考えてみよう B リンや窒素の流入によるアオコの発生 C 地球温暖化 D 危険な化学物質による環境汚染 調べてみよう 日本で発生した公害 E 森林の減少 F 湿地の減少 3 節 生態系の復元 A 外来生物の影響とその駆除 考えてみよう 外来生物の駆除について考える <コラム> 奄美大島のマンガースの駆除が成功した理由 B 絶滅した在来生物の再導入 <コラム> 在来生物の個体数が増え過ぎると… C 河川や湿地の復元 調べてみよう 自分たちの住む地域で、生態系の復元のために行われている取り組みを調べる 書いてみよう 生態系と人間生活について、図で整理 4 節 人間は自然とどう付き合っていったらよいか A 社会の発展と生態系、そして環境問題 B 生物多様性条約 C 愛知目標 D 将来への展望 まとめ		・年降水量や年平均気温と純生産量との関係を理解する。 ・エネルギーは、生産者から消費者にわたる過程で減少することを理解する。 ・エネルギー効率の考え方について理解する。 ・生態系全体で見たとき、エネルギーは栄養段階が上がるごとに減少していき、栄養段階を積み重ねるとピラミッド型になることを理解する。 ・生態系により、摂食効率に違いがあることを理解する。 ・これまでに学習した用語を使って、生態系の物質生産と物質循環について整理する。 ・生物種の数に記載された図版をもとに、生物多様性の定義について考える。 ・種の多様性の定義について理解する。 ・絶滅速度について理解する。 ・人間活動の影響により、絶滅速度が上昇していることを見いだす。 ・絶滅速度について計算し、考察する。 ・遺伝的多様性の定義について理解する。 ・生態系の多様性の定義について理解する。 ・生物の多様性における3つの多様性の高さは、互いに関連していることを理解する。 ・世界人口の推移のグラフから、人間の人口が20世紀に入ってから激増していることに気づき、そのことが生物にどのような影響をもたらすか考察する。 ・資料をもとに、農業において肥料や堆肥に含まれる窒素が生態系に流出することを見いだす。 ・生態系に流出した窒素が、どのような影響をもたらすのか考察する。 ・農業において肥料を使うことで生態系に影響を与えることを理解したうえで、我々が肥料を用いた農業から得ている恩恵についても考察する。 ・環境中のリンや窒素の濃度が高くなった場合の影響を理解する。 ・地球温暖化とその原因および影響について理解する。 ・人間が環境中に放出した化学物質による、生態系への影響について理解する。 ・日本で発生した公害について、原因と年代を調べてまとめる。 ・人間活動により世界の森林面積が減少していることを理解する。 ・森林の減少がもたらす影響について、森林の役割と関連付けて理解する。 ・人間活動により干潟や湿原などの湿地面積が減少していることを理解する。 ・湿地の減少がもたらす影響について、湿地の役割と関連付けて理解する。 ・アマミノクロウサギの個体群の回復のためには、さまざまな生物どうしの関連について理解する必要があることに気づく。 ・外来生物と在来生物について理解する。 ・外来生物がもたらす影響について理解する。 ・外来生物の駆除がもたらす影響について理解する。 ・外来生物の駆除について、その目的やさまざまな課題について考えを深める。 ・外来生物駆除の成功事例をもとに、生物の駆除による生態系の復元において必要なことを理解する。 ・地域絶滅した生物の再導入について、いくつかの事
--	---	--	--

			例をもとにその 取り組みの概要を理解する。 ・外来生物の増加だけでなく、在来生物の増加も生態系のバランスを 崩すことがあることを理解する。 ・河川や湿地の復元のための取り組みについて理解する。 ・生態系の復元のための取り組みについて調べ、身の回りで行われている取り組みとこれまでに学んだ事例を関連づけて理解を深める。 ・これまでに学習した用語を使って、生態系と人間生活について整理する。 ・SDGs と、これまでに学習した内容を関連づけて考える。 ・社会の発展が生態系や環境にもたらした影響について理解する。 ・生物多様性条約について理解する。 ・生物の持続的な利用について理解する。 ・愛知目標の未達成について理解するとともに、今後取り組むべき課題を理解する。 ・自然と共生する社会の実現に向けて、私たちが取り組むべきことを理解する。 ・新型コロナウイルス感染症が人獣共通感染症であることを理解する。 ・人間活動の拡大が、新しい人獣共通感染症をもたらすきっかけになりうることを理解する。 ・生物多様性のもたらす恵みと災厄について考えを深める。 ・まとめ
--	--	--	---

2 評価の観点

知識・技能	テストの結果で評価します。
思考・判断・表現	レポートの最終問題で評価します。
主体的に学習に取り組む態度	スクーリング時に取り組む姿勢や、成果物で判断します。 ※メディア視聴の成果もこの観点で評価します。

3 評価の方法

上記の観点に基づき、年度末に 5 段階で評定を出します。 【知識・技能】テスト結果（7 割） 【思考・判断・表現】レポート最終問題（2 割） 【主体的な態度】スクーリングの時の成果物（1 割）
--

4 担当者からのメッセージ

生物では、スクーリングへの出席（取り組む姿勢）、レポートの提出（レポートの内容）、試験結果を総合的に判断し、評価します。面接指導だけで教科書の全範囲を解説することは難しく、一回の説明の速度も速いものです。教科書を読み、各回の範囲を予習し、レポートをできるだけ完成させた上で面接指導にのぞむことを推奨します。分からないところは教科担当に聞いてみてください。皆さんが理科に興味を持つことを期待しています。
